

て来ている。施設に於ては、行きとどきにくい個人的な一対一の母性的愛情が、ホスピタリズムの重要な一因子をなすと考えられ、マザリングは、この方面においてホスピタリズムを或程度解消するのではないかという事が、私達の僅か二例ではあるが、顕著に認められました。収容児の変化によって充分予想せられる事であつて、今後更に数多くのケースについて実験するならば、より積極的な結論が得られると思ふ。

幼児に与える保母の影響について

名古屋市立保育短期大学

珠川善子
岩瀬節子

研究目

就学前の園児の行動並びに態度に、決定的影響を及ぼすものは、家庭に於ける父母と、保育園に於ける保母の行動並び態度にある事は、云う迄もない事である。

一日の生活の大部分が、保育園での生活である為に、園児にとつて保母は、親に次いで、絶対的権威者であり、保母への同一視の欲求が極めて強く、保母の行動及び態度を模倣する事によって、この欲求を充たそうとするのである。

保母の一挙手、一投足は、何らかの形で、子供の行動並びに、反映するものと考えなければならない。従つてこゝした前提に立つて、私はこの調査を試みた。

手続

A 対象及び調査期間

満六才児の男子四五名、女子四五名を対象とし、昭和三〇年一月中旬年二月中迄の約一カ月を調査期間としました。

B 調査材料

幼児が日頃好んで良く用いる、黄色、青色、赤色、緑色、白色の五色を利用して、各色別に直径一〇センチの花を作り、材料とする。

C 調査方法

個別的に五ヶの花を与え好む花から選ばせて幼児の好む花と、嫌う花との序列作製を行う。

上の調査から、幼児の最も嫌う花（緑花）を園の諸先生方の胸につけて頂く（五日間）

嫌う色の刺戟を与えた五日後に、再度好む花と嫌う花とを選ばせて記録し、好悪の序列作製をする、これを最初のと比較し見当するのである。

結果

総数の九〇名に於いて調査した結果、第一回調査の場合、好む花としては、黄色が最上位で（二九名）次いで赤、青、白、緑（二二名）となり、嫌う花に於いては、緑花が最上位で（二三名）次いで、赤、青、白、黄と表われている。（第一表を参照）

第一表

	第1回調査結果	5日後の調査結果
好きな花	黄花・29名(32.2)	緑花・26名(28.9)
	赤花・20名(22.2)	黄花・26名(28.9)
	青花・17名(18.9)	赤花・18名(20.0)
	白花・12名(13.3)	白花・11名(12.2)
嫌いな花	緑花・23名(25.6)	白花・29名(32.2)
	赤花・21名(23.3)	青花・24名(26.7)
	黄花・21名(23.3)	赤花・21名(23.3)
	白花・18名(20.0)	黄花・8名(8.9)
	白花・7名(7.8)	緑花・8名(8.9)

第二表

	第1回調査結果	5日後の調査結果
好きな花	青花・16名(35.6)	緑花・20名(44.4)
	黄花・13名(28.9)	黄花・12名(26.7)
	白花・8名(17.8)	白花・6名(13.3)
	赤花・7名(15.6)	赤花・6名(13.3)
嫌いな花	赤花・16名(35.6)	赤花・20名(37.8)
	緑花・11名(24.4)	白花・13名(28.9)
	黄花・8名(17.8)	青花・6名(13.3)
	白花・6名(13.3)	黄花・6名(13.3)
	赤花・4名(8.9)	緑花・3名(6.7)

()内は%

この調査結果から、最も幼児の嫌う色花である緑色の花を、諸先生方につけて頂き、この花でもって幼児に刺戟を与えた五日後の再度の調査結果は、好む花に於ては、緑花が最上位に上と(二六名)次いで、黄、赤、白、青の順序となり、嫌う花では、白花、青、赤黄、緑(八名)と大きく変動した事が明らかに現われている。

男女別に、分けて見ると、男子の場合の第一回調査結果は、好む花、青花(一六名)で上位続いて、黄、白、緑(七名)赤花、嫌う花は、赤花(一六名)緑(一一名)白、黄、青(四名)であったのが、刺戟を与えられた五日後の結果では、好む花は、緑花(二〇名)で最上位に上り、続いて、黄、白、青(六名)赤となり、嫌う花に於いては、赤花、白、青(六名)黄緑(三名)で、緑花が全体に変化

している。(第二表参照)

女子の場合を見ると、第一回調査結果に於ける好みの花は、赤花(一九名)黄、緑(五名)白、青の順序であり、嫌う花としては、青花(一七名)緑(一二名)白、赤、黄と現われており、男子とは全然異っている。(第三表参照)

第三表

	第1回調査結果	5日後の調査結果
好きな花	赤花・19名(42.2)	赤花・17名(37.8)
	黄花・16名(35.6)	黄花・14名(31.1)
	白花・5名(11.1)	白花・6名(13.3)
	赤花・4名(8.9)	赤花・5名(11.1)
嫌いな花	青花・1名(2.2)	青花・3名(6.7)
	黄花・17名(37.8)	黄花・18名(40.0)
	白花・12名(26.7)	白花・16名(35.6)
	赤花・10名(22.2)	赤花・5名(11.1)
	黄花・5名(11.1)	黄花・4名(8.9)
	赤花・1名(2.2)	赤花・2名(4.4)

()内は%

五日後の結果は、好む花に於いては、赤花(一七名)黄、緑(六名)、白、青、で順位に変化は見られない。

嫌う花では、青花(一八名)次いで、白、緑五名赤、黄となり、緑花が二分の一に減少した所に、変化らしきものが、うかがわれる。

考察

目立たぬ緑花を、材料に用いたにも関わらず第一回調査結果と刺戟を与えた後の調査結果を比較して全体的に見ると、好む花に於いて約二倍に増加し嫌う花では約三分の一に減少した事は、先生方の子供に与える影響と考えられる。男女を比較して見ると、男子の方が緑花の刺戟に対して影響が大きく現われている。女子の場合、大きな変化は見られないが、しかし嫌う花に於いて、二分の一に減少した事は、やはり、先生の影響を受けていると思われる。

以上でこの実験の結果は、最初期待した程の大きな変化が好みの序列に見出す事は出来なかったが、保母が胸につけた花の影響を受けて、それが好みの序列に反映した事は確かであると、云う事は出来る。

幼児の知能に関する調査

愛育研究所 村山貞雄

和田礼子

伊勢山はつ

わが国の幼児の知能を団体的に検査して、相当数の幼児の知能について種々の調査をこころみることが、私達の研究の目的である。すなわち、幼児の知能について統計をとる場合、広い地域にわたってできるだけ多数の幼児について調査をすることが大切であると考えられる。そのために、幼児を団体的に測定することを考えた。そこで、幼児に適用される知能検査を利用しようとしたが、私達の希望にあうものがなかったので、知能検査用紙をまず作成した。幼児の知能を団体的に測定することは困難であるが、その原因を調査したところ、第一に近所の者の答をみたり、または逆に教えてやったりすること、それから第二に、幼児が検査にのって来ないこと、この二つが大きな原因であることが分った。

そこで、第一の困難な原因であるとなりの者を見たり逆に教えたりにすることを防ぐために、この検査用紙では、調査用紙を第一部と第二部の二種類作成し、これを一人おきにくばるようにした。この一部と二部は、検査者の指示や、検査の方法や、頁をあらわすカットなどはまったく同じであるが、答の位置や答の内容が違っているから、検査者は全体の幼児を同時に検査できるが、被検者である幼児がとなりの者をもみても役に立たぬことになる。そこでカンニングを防ぐことができた。

第二の困難な原因である検査にのらないことを防ぐために、問題は、一頁に一つだけとして、解答法はすべてクレヨンで丸を一つつけるだけにした。また問題の上に問題のありかを示すためのカットを大きく印刷した。それでも、なお用紙をひらいたときに、両方を見る幼児があるので、右の頁を青で印刷し、左の頁を赤で印刷した。調査の方法は、この検査を二回に分けておこなうようにし、第一回目から約十日ぐらい経った時にもう一回、今度は、一回目に第一部をやった者は第二部を、一回目に第二部をやった者は第一部をやるようにしたが、このようにすると、一回の検査が大体二十五分以内で済むので、幼児があきてしまつていい加減に答えることを防ぐことができた。しかも、二回調査することによって、検査の量がかなり多くなるので、大体精密に測定できた。なお幼児の検査に特にありがちなことであるが、その時のコンディションのむらによって生じる検査結果の影響を、検査に二回に分けておこなうことによつてかなり防げた。

なお採点は、上の頁の数字のまわりにある九つの星印の中に点を